

植民地期インドのユダヤ・コミュニティとシオニズム*

井 坂 理 穂

はじめに

本稿は、インド西部に在住する「ベネ・イスラエル (Bene Israels, 「イスラエルの子どもたち (息子たち)」の意)」¹⁾ と呼ばれるユダヤ・コミュニティの人々に焦点を当て、イギリス植民地期の政治・社会変動のなかで、彼らがいかなるかたちで自らのユダヤ・アイデンティティを主張し、どのようにシオニズムとかかわっていたのかを考察するものである。とりわけここでは第一次世界大戦終結前後から1930年代にかけての時代に焦点を当てる。この時代には、M. K. ガーンディーのもとでインド・ナショナリズムが台頭し、欧米においてはパレスチナにおける「ナショナル・ホーム (民族的郷土)」建設を掲げるシオニストたちの活発な活動が展開されていた。こうした政治動向の影響を受けながら、ベネ・イスラエルのエリートたちは、インド社会における自らの立ち位置を改めて検討するとともに、シオニズムやパレスチナとのかかわりを模索しはじめるようになる。

本稿は、近現代インドにおけるベネ・イスラエルのエリートたちの帰属意識や「故郷」をめぐる言説の変遷を考察するという、より長期的な研究の一部である。このコミュニティの帰属意識のあり方に焦点を当てることは、ユダヤをめぐる研究において繰り返し立ち現れる「ユダヤとは誰か」という問いに対して、南アジア史研究の分野からの視点を提供するとともに²⁾、戦間期から独立後にかけてのインド政治を、世界情勢との複雑な絡み合いのなかで再考するための新たな手がかりともなうと思われる。

本稿で取り上げるベネ・イスラエルと呼ばれるコミュニティは、紀元前にインド西部に到来したユダヤの子孫であるとの伝承をもつ人々である。18世紀以前のコミュニティの歴史に関しては不明な部分が多く、彼らのユダヤとしての起源については、インド在住の他のユダヤ・コミュニティから疑問視する声があげられることもあった。こうした状況は、彼らのシオニズム、パレスチナ認識にも様々な影を落とすことになる。

近現代のベネ・イスラエルに関する歴史学・社会学・文化人類学の分野での研究は、英文においてはかなりの蓄積がある³⁾。近年ではベネ・イスラエル出身の詩人・作家の文学作品も広く注目を集めており、研究者によるそれらの作品分析も行われている⁴⁾。本稿はこれらの先行研究を踏まえつつ、植民地期にベネ・イスラエルのエリートたちが出し

ていた出版物、シオニストたちの著作、当時の新聞・雑誌などを用いながら、ベネ・イスラエル・エリートと海外からのシオニストたちとの交流の様子や、ベネ・イスラエルの間でシオニズムやパレスチナに関していかなる見解が表されていたのかを明らかにする。

以下ではまず、インドのユダヤ・コミュニティの歴史をかいつまんで紹介する。インドのユダヤについて邦文で紹介した文献が極めて限られていることもあり⁵⁾、ここではベネ・イスラエル以外のユダヤ・コミュニティの歴史についても簡単な説明を加える。続く第2節では、ベネ・イスラエルの歴史や、植民地期における彼らの社会状況を概観する。第3節では、第一次世界大戦終結前後から1930年代にかけて、ベネ・イスラエルのエリートたちがシオニズムやパレスチナ構想に対してどのような認識を示していたのかを、インド・ナショナリズムの動向や植民地支配体制の変化などの背景とともに論じる。第4節では、彼らが海外からインドを訪れたシオニストたちとどのように交流していたのかを紹介しながら、これらの交流が彼らの帰属意識やパレスチナ認識に与えた影響を考察する⁶⁾。

1. インドのユダヤ・コミュニティ

インドのユダヤ人口は植民地期においても1891年センサスの時点で17,194人、1931年センサスでは24,141人という小規模なものであった[Baines 1893: 171; Hutton 1933: 390]。さらに1947年にインド・パキスタンが分離したかたちでイギリスから独立し、1948年にイスラエルが建国されると、多数のユダヤがイスラエルその他の地域に移住したため、現在ではその人口は約5,000人にまで減少している。このようにインドの「マイノリティ」のなかでも「とりわけ小さなマイノリティ (microscopic minority)」と評されるユダヤだが、実際にはその小規模な人口でさえも一括りで語ることが難しい状況となっている。というのも、彼らは歴史・言語・文化において、互いに大きく異なる複数のコミュニティからなっており、それらのコミュニティ間に強い一体感があるとは言い難いためである。

これらの複数のユダヤ・コミュニティのうち、最も多くの人口を占めているのが本稿で取り上げるベネ・イスラエルである。その大部分はインド西部のマハーラーシュトラ州の大都市ムンバイやブネー、及びコーンカン地方の村々に居住し、一部がグジャラート州その他の地域に散在している。彼ら自身の伝承によれば、その祖先は古代イスラエルの「失われた10部族」に属し、紀元前にインド西部のコーンカン地方に漂着した。その後、この地で農業や油絞りで生計をたてるなかで、ヘブライ語を忘れ、在地の慣習を取り込み、ユダヤの信仰を意識することなく暮らしていたのだが、あるできごとをきっかけに、ユダヤとしての自らの起源やアイデンティティを認識するようになったとされている。このできごとの詳細や植民地期における彼らの状況については次節で詳述する。

ベネ・イスラエルの多くは、印パ分離独立・イスラエル建国以降、主にイスラエルへ移住している。彼らの間では、インドを「母なる地 (motherland)」、イスラエルを「父なる地 (fatherland)」と呼び、対比的に表現することも多い。

このベネ・イスラエルの内部にも、さらに「白い」ユダヤと「黒い」ユダヤという区分が存在する。前者は先祖がユダヤのみからなるとされる家系の人々、後者はユダヤと非ユダヤとの婚姻から生まれた人々やその子孫、あるいは他の宗教からユダヤ教に改宗した人々やその子孫を指す [Enthoven 1990: 71-2; Kehimkar 1937: 31-2; Reuben 1913: 2]。「白い」ユダヤと「黒い」ユダヤの間には序列意識があり、通婚や共食が避けられるなど、前者が後者に対して差別的な対応をとることもあったが、近年ではこうした区分が語られることは少なくなっている。

以上のようにインドに古くから住んでいたベネ・イスラエルに対し、18世紀以降にイラク、シリア、イランその他から移住してきたユダヤは、「バグダーディー・ユダヤ (Baghdadi Jews)」あるいは「バグダーディー (Baghdadis)」と呼ばれている。彼らは主にコルカタ、ムンバイ、プネーなどの都市に居住している。このコミュニティの出身者のなかでとりわけ有名なのが、バグダード出身で、1832年にボンベイ (現ムンバイ) に移り住み、商業の分野で活躍したディヴィッド・サスーン (David Sassoon, 1792-1864) である。彼は綿花やジュート、アヘン貿易などで成功をおさめ、シナゴグ、教育機関、病院をはじめとする公共施設の設立にも携わった。今でもムンバイやプネーには彼の名前を冠した建築物が複数存在する。

植民地支配下のインドにおいて、英語教育を受けたバグダーディー・エリートたちは、自分たちの文化・慣習がヨーロッパの人々のものに近いことを強調し、インド・ナショナリズムとは距離をおく傾向がみられた。また、バグダーディーの間では、ベネ・イスラエルのユダヤとしての起源が不明瞭なことや、彼らが現地化された慣習をもつことを理由に、彼らに対して差別的な対応がなされることもあった。植民地期には、ベネ・イスラエルとの通婚を避けたり、シナゴグの儀礼におけるベネ・イスラエルの役割を制限するなどの事例もみられ、しばしばベネ・イスラエルからの異議申し立てや反発を招いている [Masliyah 1994; Roland 1989: 20-1]。バグダーディーとベネ・イスラエルの間のような関係は、両者がユダヤとして結束して政治・社会運動を組織することを大きく妨げていた。植民地期には両コミュニティは、ともに様々な社会活動を展開しているが、それぞれがそのために異なる結社を設立しており、スポーツの分野においてさえも、双方が異なる団体を設立している [Marcus 2019]。

インド独立後、バグダーディー人口の大部分はインド国外へ移住している。移住先はイスラエルばかりでなく、英語の知識や高等教育を受けた経験などを生かして、イギリス、オーストラリア、香港、カナダ、アメリカなどへ移住している者も多い。もともと数千人規模であった人口は、今日では100にも満たない状況となっている [Weil 2019: 4-5]。

そのほか、インド南西部のマラバール海岸には、やはりインドにおいて長い歴史をもつ「コーチン・ユダヤ (Cochin Jews)」が存在していたが、現在までにこのコミュニティの成員も、そのほとんどがイスラエルその他の地域へ移住している⁷⁾。コーチン・ユダヤもベネ・イスラエルと同様に、古代にインドにやってきたとされ、その時期は紀元前のソロモン王の時代とも、紀元後1世紀ごろともいわれている。彼らの間にも、「白い」ユダヤと「黒い」ユダヤの区分やそれに基づく序列・差別意識がみられるが、それぞれが指す範囲はベネ・イスラエルの場合とは異なっており、前者は古代から在住していたユダヤの子孫、後者は16世紀以降にヨーロッパや西アジアから同地に移り住んだユダヤの子孫であるといわれている [Weil 2002: 16-9]。

これらの3つのコミュニティに加えて、北東インドのミゾラム州やマニプル州、南部のアーンドラ・プラデーシュ州には、20世紀後半になってから、自身がユダヤの「失われた10部族」に属すると主張しはじめた人々がいる。北東インドの場合には、いわゆる「トライブ」に属し、植民地期にキリスト教に改宗していた人々のなかから、1950年代からユダヤとしての意識をもつ人々が現れ、「ベネ・メナシェ (ブネイ・メナシェ, Bene Menashe, Bnei Menashe)」を名乗るようになった。2010年代以降はイスラエルへの移住も進んでいる [Egorova and Perwez 2013: 118-20; Jenkins 2019: 98]。アーンドラ・プラデーシュ州の場合には、ダリト (かつて「不可触民」と呼ばれた人々) に属するメディアガというコミュニティで、やはり植民地期にキリスト教に改宗した人々のなかから、1980年代以降、自らをユダヤとしてとらえる動きが始まり、彼らは「ベネ・エフライム (ブネイ・エフライム, Bene Ephraim, Bnei Ephraim)」を名乗っている [Egorova and Perwez 2013]。彼らはユダヤとしての慣習や儀礼を取り込みつつ、ユダヤ教の宗教指導者たちから「正統」なユダヤとして認知されることを求めている⁸⁾。

2. ベネ・イスラエルの歴史——伝承から植民地期まで——

次にベネ・イスラエルの歴史について、在地社会との関係に留意しながら、より詳細にみてみたい。前述のように、ベネ・イスラエルの間でよく語られる伝承によれば、彼らの祖先は「失われた10部族」に属し、紀元前175年ごろにパレスチナをあとにしたとされる。彼らの乗った船がインド西部のコーンカン沿岸沖で難破し、7名の男女のみが助かったといわれている [Kehimkar 1937: 14; Reuben 1913: 3; Roland 1989: 11]⁹⁾。このユダヤのインド西部到来の物語についての史料的裏付けはなく、その時期をめぐっては異なる解釈が存在する。上記の説のほかに、前10世紀のソロモン王の治世のときに到来したとも、70年の第二神殿破壊のあとのできごとであるとも、5、6世紀ごろにアラビア南部やペルシアから到来したともいわれている。

伝承によれば、彼らは漂着した先のコーンカン地方に定着し、その過程でヘブライ語

を忘れ、在地の言語を話すようになり、現地の諸慣習を取り入れていく。農業や油絞りの仕事に携わるようになった彼らは、ユダヤとしての信仰も次第に忘れていった。しかし彼らの間には独自の慣習も保持されており、土曜日に仕事を休んだり、ひれやうろこのない魚介類を食べないなどの慣習が残っていたほか、「シェマ（聞け）、イスラエルよ」で始まる祈りの言葉は覚えていたとされる。在地社会のなかで、彼らは「土曜日の油絞り（Shanvar Teli, Shanivar Teli）」と呼ばれていたが、この名称は彼らの職業である油絞り（teli）と、彼らが土曜日（Shanvar, Shanivar）に休むという習慣に由来するものともいわれている。

このような生活を送っていた彼らが、ユダヤとしての自覚をもつようになったきっかけは、ディヴィド・ラハビ（David Rahabi）という人物の来訪であったと伝えられている。この人物がいつやってきたのかについても諸説あり、史料的に裏付けることは難しい。時期については、10 世紀、14 世紀、あるいは 17 世紀ともいわれており、どこからやってきたのかについても、エジプト、コーチンなど異なる説がある。ディヴィド・ラハビはこの地方に住むあるコミュニティがユダヤと似た慣習をもつこと、とりわけひれやうろこのない魚介類の消費を避けるというカシュルート（ユダヤ教の食にまつわる規定）を守っていることを確認し、彼らがユダヤであると確信する [Kehimkar 1937: 40-1; Reuben 1913: 3]。ラハビは彼らにヘブライ語の読み書きを教え、再び彼らの間にユダヤとしての意識を芽生えさせたとされている。ディヴィド・ラハビが実在していたのか、いつ来訪したのかは謎のままだが、いずれにしても 1730 年代には、デンマークから来訪したキリスト教宣教師が、インド西部に住む、聖書ももたずヘブライ語を知らないが、「シェマ」の言葉を唱え、他のインド人と通婚をしない「ベネ・イスラエル（イスラエルの子どもたち）」について耳にしたことを書簡に記している [Israel 1984: 10, 54; Isenberg 1988: 49-50]。つまりこのころまでには、インド西部のユダヤの存在が他の地域に知られるようになっていたことが確認できる。18 世紀後半には、コーチン・ユダヤとベネ・イスラエルの間ですでに交流が始まっており、前者が後者にユダヤ教について教えていたことを示す史料も残されている [Israel 1984: 55]¹⁰⁾。

18 世紀以降、ベネ・イスラエルはコーチン・ユダヤやヨーロッパからやってきた宣教師らとの交流を通じて、ユダヤに関する知識を習得していく。また、イギリス支配が拡大するなかで、教育や就職の機会を求めて村落から町へ、さらにボンベイへと移動する人々が増加する。1796 年にはボンベイに初のシナゴグが設立されている。キリスト教宣教師による教育活動や、植民地政府のもとで形づくられた教育制度は、彼らの生活や意識に大きな変化をもたらした。彼らのなかには、植民地政府の軍隊に入ったり、英語の知識を身につけて官僚職や専門職に就くなどして、経済的・社会的地位を上昇させる人々も現れた¹¹⁾。とりわけ軍隊でのベネ・イスラエル出身者の活躍は際立っている。こうした経済的・社会的地位の変化を背景に、ボンベイやその近郊、プネー、コーンカン地

方の村々、アフマダーバード、カラチーで、ベネ・イスラエルによって次々とシナゴーグが設立されている [Isenberg 1988: 148–52; *Jewish Landmarks of India* 2015; Judah 2017]。

植民地支配下での宣教師たちとの交流や英語教育の普及は、ユダヤの教義や慣習に関する彼らの理解を促すことにもなった。インド西部にやってきたイギリスやアメリカのキリスト教宣教師たちは、ベネ・イスラエルがキリスト教に改宗することを期待しつつ、ヘブライ語を教えたり、旧約聖書を現地語でありベネ・イスラエルの母語でもあるマラーティー語に翻訳したり、マラーティー語によるヘブライ語文法の執筆・出版を行うなどしている [Isenberg 1995: 94–7; Numark 2012; Roland 1989: 14]。こうしたなかで、ベネ・イスラエルはキリスト教に改宗することなく、むしろユダヤ教に関する理解を深め、それをもとにユダヤとしての宗教・生活実践をより強く意識するようになる。さらに英語文献からの知識の習得や、バグダーディーやコーチン・ユダヤとの交流も、彼らのユダヤ教に関する理解や認識に影響を与えることになる。

19 世紀後半になると、インドの他のコミュニティの場合と同様に、ベネ・イスラエルのなかからも、コミュニティの経済的・社会的地位の上昇や、コミュニティ内部の結束、文化・伝統の保持などを目指して、結社を設立するなどの動きがみられるようになる。例えば軍に勤務し、のちには教育者として知られるようになる H. S. ケーヒームカル (Haeem Samuel Kehimkar, 1830–1909) は、ベネ・イスラエルの貧困層、寡婦や孤児などを救済するために、1853 年にベネ・イスラエル慈善協会を設立している。彼はさらに 1875 年にはベネ・イスラエルの子弟ための学校を設立し、ロンドンのアングロ・ユダヤ協会の援助を得ながらこれを発展させている [Kehimkar 1937: VI; Reuben 1917: 50–3]。このようなコミュニティのための社会活動は、20 世紀に入るとインドの統治制度の変革やナショナリズムの台頭、シオニズムの動向なども反映しながら、さらに活発化していくことになる。

3. ベネ・イスラエルとシオニズム

上記のように植民地支配下での教育・社会状況の変化の影響のもとで、ベネ・イスラエルはユダヤとしての宗教・生活実践をより意識するようになっていったのだが、さらに 20 世紀に入り、第一次大戦を契機として国内外で大きな政治変動が起こると、その変動に対応するなかで、彼らは自らのユダヤ・アイデンティティの意味を改めて問い直すことになる。

ここでまず、第一次世界大戦終結前後のユダヤをめぐる国際情勢を振り返ってみよう。1917 年 11 月、イギリス政府の外相アーサー・バルフォアは、ユダヤの名門ロスチャイルド家のライオネル・ウォルター・ロスチャイルドにあてた書簡のなかで、イギリス政府がパレスチナにおけるユダヤのための「ナショナル・ホーム（民族的郷土）」の建設構

想を支持することを明言し、その旨をシオニスト連盟に伝えるように依頼する（いわゆる「バルフォア宣言」）。イギリス政府はすでに「フサイン・マクマホン協定」を通じて、アラブ勢力に戦後の独立国家樹立の支援を約束しており、もう一方では「サイクス・ピコ条約」などを通じて、戦後におけるオスマン帝国領の分割について、フランス、ロシア、イタリアとの間で秘密協定を結んでいた〔臼杵 2013: 172-7; 奈良本 2005: 64-75〕。これらの三方面での政策が相互に矛盾していたことは明らかであり、これがその後現在にいたるまで続くパレスチナ問題を生み出す契機となる。1920 年 4 月には、連合国がイタリアのサンレモに集まり、オスマン帝国領の処理について協議し、そのなかでパレスチナはイギリスの委任統治下に入ることが決定する。こうして、バルフォア宣言にもとづき、イギリス委任統治のもとで、ヨーロッパのユダヤのパレスチナ移住が進められていくことになる。

これに対応して、シオニストたちはパレスチナにおけるナショナル・ホーム建設に向けた資金集めに乗り出す。募金の呼びかけは欧米のみならず、世界各地のユダヤに対しても行われた。インドにおいても、1920 年代以降、シオニズム組織の代表者たちが次々に来訪し、パレスチナのナショナル・ホーム建設に向けた協力を募っている。それまでシオニズムとのかかわりが薄かったベネ・イスラエルも、これを契機に、欧米で活動するシオニストたちとの接点をもつようになる。

実はバルフォア宣言自体は、その直後からベネ・イスラエルのエリートたちの間で話題となっている。ただし、当初は彼ら自身に直接かかわるできごとであるとは必ずしも認識されていなかった様子がうかがえる。例えば 1917 年 12 月 25 日から 27 日にかけてボンベイで開催された、第一回ベネ・イスラエル会議（後述）では、議長の J. B. バムノールカルが演説のなかでバルフォア宣言について短く言及している。そこでは、イギリスがパレスチナにおいてユダヤのナショナル・ホーム樹立を支持する旨を宣言したことや、それによって「かの地に入植するという、西洋にいる我々と宗教を同じくする人々の多くがもつ望み」が実現しつつあることが歓迎されている〔*Report of the 1st Bene-Israel Conference* 1918: 36〕。ここで用いられている表現からうかがえるように、パレスチナにおけるナショナル・ホームの樹立は、当時のベネ・イスラエルの多くの人々にとっては、「自分たち」のことというよりは、「西洋」に住むユダヤに関することがらであり、「彼ら」のために歓迎すべきことであった。

1919 年 4 月 2 日にボンベイのシナゴグで開催されたベネ・イスラエルの集会では、イギリスのシオニストの運動への共感を表す決議が採択されている〔Roland 1989: 146-7〕。しかし同じ集会では、一部の人々からシオニズムへの懸念も表明されている。例えば、ユダヤのなかでの階級や肌の色による差別の存在を指摘する声や、シオニズムがベネ・イスラエルに対して何の保証もしておらず、ベネ・イスラエルもまたシオニズムについての知識をもちあわせていないとする声もあげられている。こうした不安の背景には、

彼らがインドの他のユダヤ・コミュニティからの差別を経験しており、ユダヤ内部での序列意識に警戒せざるをえなかったことがあったと思われる。

さらに、インドのムスリム指導者たちがバルフォア宣言に強く反発していたことも、ベネ・イスラエルのシオニズムに対する認識に影響を与えていた可能性がある。1918年に開かれた全インド・ムスリム連盟の第11回大会では、議長のM. A. アンサーリーが、イギリスのパレスチナ政策がインドのムスリムに大きな痛みと憤りを引き起こしていることについて、抗議の意を表している[Roland 1989: 84]。さらに第一次大戦終結以降、ムスリムの間では、大戦に敗れたオスマン帝国のカリフの地位が連合国によって脅かされることを懸念し、カリフ擁護を求める運動が展開されていた(ヒラーファト運動)。この運動にインド国民会議派が協力することによって、1920年から1922年にかけて、イギリスに対する大規模な非協力運動が組織されていく。

こうした状況のなかで、ベネ・イスラエルのエリートの中には、パレスチナ問題がインド国内における彼らとムスリムとの間の関係に影響を及ぼすのではないかとの不安を覚える人々もいた[Isenberg 1988: 271]。また、それ以前からベネ・イスラエルの間では、自分たちはヨーロッパのユダヤとは異なり、インドにおける長い歴史のなかで迫害を受けることがなかったとの言説がしばしば表されていた点にも留意したい¹²⁾。生活様式・慣習、言語など、多くの面で長年にわたり在地社会に深く組み込まれていたベネ・イスラエルにとっては、パレスチナでのナショナル・ホーム建設は、ヨーロッパのユダヤのためのものであり、彼ら自身がインドを離れてイスラエルに移住するというイメージは、当時はおよそわからなかったものと推測される。むしろパレスチナをめぐる状況は、それがユダヤ・ムスリム間の対立を招くことによって、インド国内におけるユダヤとムスリム、あるいはユダヤとナショナリスト勢力との間に緊張関係をもたらす可能性もあるがゆえに、彼らにとって複雑な意味合いをもっていた。

しかし、こうしたジレンマをかかえつつも、海外のシオニストたちからの働きかけもあり、1920年にはボンベイでベネ・イスラエル・シオニスト協会(Bene Israel Zionist Association)及びボンベイ・シオニスト協会(Bombay Zionist Association)が設立されている。前者はベネ・イスラエルの、後者はバグダーディーの組織であり、ここでも両者は、同じようにシオニズムを掲げながらも、別々の組織を築いている。

このようなかたちでベネ・イスラエルがシオニズムに目を向け始めたころ、インドの統治体制にも重要な変化が起きていた。大戦中のインドにおける自治要求の高まりを背景に、インド担当大臣モンタギュー¹³⁾とインド総督チェルムズフォードは、1917年からインドの憲政改革について検討を始め、翌年に報告書を議会に提出し、これに基づき1919年末にインド統治法が制定された。この統治法では、州の行政権が部分的にインド側に譲渡され、州議会の民選議員の数が増加するとともに、その権利も拡大した。議員を選ぶための選挙は分離選挙制のかたちで行われ、集団ごとの議席配分が決められ、それぞ

れの集団ごとに選挙区が分けられた。

この選挙制に関して、ベネ・イスラエルの指導者たちの間では、ユダヤのための留保議席や別枠の選挙区を求めるか否かが議論されている。憲政改革の内容が検討されていた1917年11月、複数の指導者たちが連名でモンタギューに意見書を提出している。そのなかで彼らは、自身を「とりわけ小さなコミュニティ (microscopically small community)」と位置づけつつ、インドの長い歴史のなかで、多数派は少数派に対して「寛容の精神と公平性」を実行してきたとして、その人口規模にかかわらず、彼らの権益は保護されてきたとの見方を示している [Roland 1989: 52]。また、ムスリムの場合と異なり、彼らのようなマイノリティのなかでもさらに小さなコミュニティは、分離選挙によって (わずかな数の) コミュニティ代表を確保できたとしても、その政治的効果は少ないとの見解を示している。同じような姿勢は、のちに、州行政をインド側に全面的に移譲した1935年統治法が制定された際にも、繰り返し表明されている。こうしたベネ・イスラエルの姿勢は、バグダーディーの指導者たちの間で、自身を「ヨーロッパ人」の選挙区に含めることを求める動きがあったのとは対照的であった。

このようにインドにおける彼らの権益が守られているとの見解を示す一方で、ベネ・イスラエルの間では、他のコミュニティと彼ら自身とを比較しながら、コミュニティの結束や経済的・社会的地位を向上させる必要性を説き、ユダヤとしての伝統を強調する動きも活発化している。それを象徴的に表しているのが、1917年12月の第一回ベネ・イスラエル会議の開催である。派閥を超えて、広範なベネ・イスラエルのエリートたちが集うはずであった会議は、結果的には派閥の対立を解消できないままに開催されることになったのだが、こうしたコミュニティ組織の必要性が指導者たちの間で広く認識されていたことがうかがえる。J. B. バムノールカルの議長演説では、インドの他のコミュニティの状況と彼らの状況とが比較され、コミュニティの直面する問題を話し合うための会議をもつことの意義や、コミュニティ内部の教育水準をさらに引き上げる必要性などが強調されている。また、会議で採択された決議のなかでは、宗教教育やヘブライ語学習の促進、コミュニティ内部のさらなる社会改革、奨学金のための基金設立、禁酒運動や慈善活動の推進などが呼びかけられている。さらに、「我々のコミュニティの真の歴史」を出版することや、そのための資料収集も推奨されている [Report of the 1st Bene-Israel Conference 1918]。こうしたコミュニティの結束や地位向上を目指す動きは、大戦後にはより活発なものとなっていく。そこには、インド・ナショナリズムの盛り上がりや統治体制をめぐる変化を背景に、コミュニティの権益をいかに守るかを模索する彼らの様子が表れている。

大戦後のインド・ナショナリズムの動向としては、1919年にローラト法反対運動、1920年代に非協力運動、1930年代に不服従運動が組織され、インド国民会議派の影響力が急速に拡大する。そうしたなかで、それまで親英的な傾向の強かったベネ・イスラエルの

エリートのなかからも、インド・ナショナリズムへの共感や協力をより積極的に打ち出す人々が現れようになる。ガーンディーが「塩の行進」を組織した1930年には、I. J. ソロモン、A. S. エールルカルらによってユダヤ・ナショナリスト党 (Jewish Nationalist Party) 設立のための会合も開かれている。参加者の多くはベネ・イスラエルであり、そこでは国民会議派のもとで行われているスワーデーシー (国産品愛用運動) や外国製品ボイコットへの参加、禁酒運動への呼びかけなどが行われた [Isenberg 1988: 250-2; Roland 1989: 104]。この会合の参加者の一人であった教育者のシャローム・アブラハムは、彼らユダヤもサティヤグラハ (非暴力運動) に参加する必要を訴え、ユダヤはヒンドゥーやムスリムから兄弟のように扱われてきたのであり、彼らが独立のために戦っているときに傍観しているのは恩知らずである、とまで述べている [Roland 1989: 104]。同組織の活動は活発なものとはなかったが、ここにもインド・ナショナリズム台頭のなかで、ベネ・イスラエルのエリートたちが、インドにおける自身の立ち位置をめくり模索している様子がみてとれるだろう。

4. シオニストたちとの交流

ベネ・イスラエルの人々がこうしてインドのなかでの自らの立ち位置を探るなかで、彼らの意識に徐々に影響を与えるようになっていったのが、海外のシオニストたちからの働きかけであった。1920年代以降、欧米からシオニストたちが次々にインドに来訪し、募金活動を行うなかで、ベネ・イスラエルやバグダーディーと活発な交流を展開する。例えば1921年にはロンドンの世界シオニスト機構 (World Zionist Organisation) によって、イズラエル・コーエン (Israel Cohen, 1879-1961) がインドに派遣されている。彼は、パレスチナのナショナル・ホーム建設のための資金を募るなかで、ベネ・イスラエル指導者たちと交流する。ポーランド系ユダヤの両親をもち、イギリスで生まれ育ち、ジャーナリストとしての経歴をもつコーエンは、世界シオニスト機構の中枢にいた人物であった [Cohen 1956]。彼は1920年にロンドンを出発し、パレスチナに立ち寄ったのち、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、香港、中国、日本、シンガポール、インドネシア、ビルマを回り、1921年3月にカルカッタに上陸する。カルカッタでの遊説、募金活動ののち、彼はアグラ、デリーを経てボンベイに到着し、バグダーディーとベネ・イスラエル双方のコミュニティ代表を含む大勢の人々の出迎えを受けた [Cohen 1925: 250]。コーエンはボンベイ滞在中に、バグダーディーとベネ・イスラエル間の対立や、バグダーディーによるベネ・イスラエルへの差別を強く認識したばかりでなく、ベネ・イスラエル指導者たちから直に、ユダヤ・コミュニティ内部での差別問題について意見を求められている。

コーエンとベネ・イスラエル指導者たちとのやりとりの様子は、ベネ・イスラエルの

開催したある集会についてのコーエンの回想からうかがい知ることができる。この集会の議長は、ベネ・イスラエルの指導者で医師でもあるE・モーシェーが務めたのだが、彼は500名のベネ・イスラエルの参加者たちの前で、インドで彼らが他のユダヤ・コミュニティから受けている差別について言及し、そのような差別がパレスチナにおいてもベネ・イスラエルに対してなされるのかとコーエンに問いかけている。これに対してコーエンは、そうした恐れを抱く必要はないことを保証し、最近パレスチナにやってきたイエメン人や東洋の他のユダヤと同様に、彼らも歓迎されるであろう、と述べている。また、彼らが彼らのもつ技術を通じて、パレスチナに貢献できることを主張している。コーエンによれば、聴衆はこうした彼の話を注意深く聞き、彼の呼びかけに熱狂的に応え、パレスチナのための寄付に応じたのであった[Cohen 1925: 259]。コーエンの回顧録からは、インド訪問を通じて彼がベネ・イスラエルに対して好意的な印象を抱いた様子が随所にうかがえる。コーエンによれば、ベネ・イスラエルは「強いユダヤ意識、ユダヤの教えに対する愛、イスラエルの地を復活させるという民族的任務に参加したいという強い願望」に突き動かされていた[Cohen 1925: 257]。

このコーエンの例をはじめとして、1920年代から1930年代にかけて、欧米のシオニストたちが次々にインドに来訪し、パレスチナのための寄付を募りながらベネ・イスラエルと交流し、彼らをユダヤの同胞として扱ったことは、ベネ・イスラエルにとって、自身が「正統な」ユダヤとして認知されたとの自負につながったものと思われる[Roland 1989: 151-70; *The Times of India*, 29 July 1920: 5; 3 Feb 1927: 14; 14 January 1929: 9]。コーエンと同様に、ベネ・イスラエルと積極的に交流したシオニストの例として、イマヌエル・オルスヴァンゲル(Immanuel Olsvanger, 1888-1961)についても触れておきたい。ポーランド生まれのユダヤで、サンスクリット学者でもあったオルスヴァンゲルは、パレスチナ建設のための基金の活動で各地を回った経験をもつ人物であり、パレスチナにおけるユダヤの代表組織であるユダヤ機関・政治局(Jewish Agency, Political Department)の要請によって、1936年にインドを訪問している。このときの彼の主な使命は、インド人指導者たちからシオニズムに対する理解を得ることであった。バルフォア宣言以降、インドのムスリム指導者たちからは、ユダヤのパレスチナ移住に対する強い批判が繰り返し表明されており、イギリス委任統治下のパレスチナでのアラブ・ユダヤ間の対立・衝突の様子が伝わってくると、その批判はさらに激しさを増していった。ネルー、ガンディーのようなインドのナショナリスト運動の指導者たちも、ムスリムによるイギリスのパレスチナ政策批判に共感を示しており、シオニストの側では、こうしたインド国内の動向がイギリスの政策に影響を及ぼすことが懸念されていた。このような状況を鑑みて、ユダヤ機関・政治局は、オルスヴァンゲルをインドに派遣し、彼を通じてインドの各界の指導者たちに、ユダヤの移住はユダヤとアラブが共存しながらパレスチナを発展させるのにつながる旨を説き、彼らからの理解をとりつけることを期待する¹⁴⁾。とりわけ、イン

ドの指導者たちのなかでも知名度の高いガンディーから支持を得られれば、国際的にもインド国内の世論を動かすうえでも大きな効果をもつと考えられていた [Ben David 2002: 6-7; Egorova 2006: 51]。

オルスヴァンゲルは1936年8月12日から11月7日までインドに滞在し、詩人でありナショナリスト運動にも深くかかわっていたサロージニー・ナーイドゥの助けを借りながら、各界で活躍する人々と精力的に面会し、意見を交わしている¹⁵⁾。ネルーやガンディーとも面会するが、パレスチナ問題について、彼らはアラブ側への共感の姿勢を変えることはなく、オルスヴァンゲルの面会は成果を挙げることはできなかった。

このインド訪問のなかで、オルスヴァンゲルはバグダーディー、ベネ・イスラエル、コーチン・ユダヤの人々とも会談し、とりわけベネ・イスラエル知識人たちとの間で交流を深めている。コーエンと同様に、彼もこうした交流のなかで、ベネ・イスラエルの人々から、パレスチナにおける彼らの位置づけについての疑念を表明されている。例えば、オルスヴァンゲルが、ベネ・イスラエルの指導者でありガンディーの医師を務めたこともあるアブラハム・エールルカルを訪問した際には、ベネ・イスラエルはパレスチナにおいて他のユダヤから受け入れられるのかと単刀直入に尋ねられている。オルスヴァンゲルが、彼らは受け入れられると強く保証すると、エールルカルは袖をめくり、「なんだって、この肌(の色)で?」と驚いたように尋ねたのであった [Ben David 2002: 22]。このほかに、ベネ・イスラエルのなかには、パレスチナにおけるユダヤ・アラブ間の対立についての不安を表す人々もいた。オルスヴァンゲルが参加したあるベネ・イスラエルの集会では、パレスチナにおいてユダヤ人口がアラブ人口を上回ることの危険性や、その正当性を問う声があげられている [Ben David 2002: 24]。こうしたベネ・イスラエルの反応には、インドにおけるムスリム指導者や、ネルー、ガンディーら著名な指導者のパレスチナ問題に対する見解が、ベネ・イスラエルのエリートたちの間でも意識されていた可能性を感じさせる。

オルスヴァンゲルはさらに、ベネ・イスラエルの文化・伝統に強い関心を示し、エルサレムの国立大学図書館のために、ベネ・イスラエルの記したマラーティー語の文献を入手したり、ベネ・イスラエルの歌を録音するなどの作業も行っている [Rolland 1989: 195]。また、ベネ・イスラエル知識人 H. S. ケーヒームカル (第2節参照) が1897年に英語で執筆した『ベネ・イスラエルの歴史 (*The History of the Bene Israel of India*)』の手稿が未刊行であることを知り、これを持ち帰り、1937年にテル・アヴィヴから出版している [Kehimkar 1937]。オルスヴァンゲルはこの本の冒頭に「高貴で栄誉あるインドのベネ・イスラエル・コミュニティへ」に向けた言葉を寄せている。そこでは出版の経緯が記されるとともに、「イスラエルとインドの古代文明のすばらしい統合」をつくり出したとして、ベネ・イスラエルの人々を祝福し、彼らをユダヤの他のどの集団にもみられないほどの「英雄的資質と不屈の精神をもって、ユダヤ教のたいまつを燃やし続けた」人々

であると評している。オルスヴァンゲルによれば、この本の刊行の目的は、ベネ・イスラエルとユダヤの他の人々との距離を縮めることにあった〔Kehimkar 1937: III-IV〕。同書の刊行はベネ・イスラエル知識人たちから大いに歓迎され¹⁶⁾、本書は今日にいたるまで、ベネ・イスラエルの人々が自らの起源を語る際に重要なよりどころとして参照される文献となっている。

オルスヴァンゲルはこのインド訪問の翌年に、ロンドンのアングロ・パレスチナ・クラブで行った講演のなかでも、ベネ・イスラエルについて紹介し、「ヨーロッパのユダヤと同等に純粋なユダヤ人種」であり、「我々の称賛と愛に値する」人々であると主張している。彼はまた、多くのベネ・イスラエルがパレスチナに定住することを期待するとし、それはイスラエルの利益になるであろうと主張している。さらに、パレスチナに住むユダヤの若者たちが、ヘブライ語教師としてインドに赴くことをも促している〔*Jewish Tribune*, 8-2, April 1937: 10〕。コーエンやオルスヴァンゲルのような海外のシオニストたちとの交流は、インド国内でバグダーディーなどからの差別を経験していたベネ・イスラエルにとって、彼らが「正統な」ユダヤであることを裏づけるものとして、重要な意味をもっていた。また、国内情勢の変化のなかで、インドにおける「とりわけ小さなマイノリティ」としての自らの立ち位置や権益の保護、文化・伝統の保持をめぐる模索していたベネ・イスラエルのエリートたちにとって、シオニストたちからパレスチナに彼らが受け入れられると保証されたことは、パレスチナをそれまで以上に身近なものとして感じさせることにつながった。インドを訪れたシオニストたちは、ベネ・イスラエルとの対話のなかで、パレスチナで展開されているユダヤ移住者たちの社会・経済活動や、パレスチナ発展の様子なども語っており、ベネ・イスラエルはこうした話にもひきつけられていく〔Ben David 2002: 23-4; *The Times of India*, 14 January 1929: 9〕。

さらに1933年以降は、ナチの勢力拡大に伴い、ヨーロッパから逃れてきたユダヤが次々とインドに来訪する。そのなかには、そのまま滞在する者もいれば、インドを経由して他地域へと移動していった人々もいた¹⁷⁾。このようなかたちで、ヨーロッパにおけるユダヤの緊迫した状況に間近に触れたこともまた、ベネ・イスラエルの間に、ユダヤ・アイデンティティの意味やパレスチナに対する認識を改めて考えさせる契機となったと思われる。こうした戦間期の様々な変化のなかで、第二次世界大戦、インド・パキスタンの分離独立、イスラエル建国を経たのちに、多数のベネ・イスラエルがイスラエルへ移住するという現象へとつながる道すがすが、徐々につくられていったと考えることができるだろう。

結びにかえて

本稿では、戦間期におけるベネ・イスラエルとシオニズムとのかかわりについて、同

時代におけるインドの国内情勢の変化にも留意しながら考察した。バルフォア宣言が出された直後は、ベネ・イスラエル・エリートの間では、パレスチナのナショナル・ホーム建設の構想を歓迎しつつも、やや距離をおく姿勢がみられる。彼らはとりわけ、ユダヤ内部の序列・差別意識を警戒し、パレスチナにおける彼ら自身の位置づけについての疑念をあらわにしている。しかしこうした状況は、1920年代以降の政治・社会変動のなかで徐々に変化していく。インド・ナショナリズムの台頭と、それに呼応して進められたイギリスからインドへの部分的な権力移譲のなかで、ベネ・イスラエルのエリートたちは、インドにおける「とりわけ小さなマイノリティ」としての自らの立ち位置について、改めて検討する必要に迫られる。また、パレスチナ建設への資金などの協力を求めて、海外からシオニストたちがインドに来訪するようになると、彼らとの交流のなかで、ベネ・イスラエルは自分たちが「正統な」ユダヤとしてパレスチナに受け入れられる旨を繰り返し伝えられることになる。国内の他のユダヤ・コミュニティからの差別を経験していた彼らは、こうした経験を通じて「正統な」ユダヤとしての自負を強め、パレスチナをより身近なものとしてとらえるようになる。

このような戦間期の変化は、のちのイスラエル移住の流れへとつながるものであったが、そこに至るまでの過程には、さらに第二次世界大戦、インド・パキスタンの分離独立、イスラエル建国という重要な政治変動がかかわってくることになる。この過程で、ベネ・イスラエルの帰属意識や「故郷」をめぐる議論がさらにどのように展開していくのかについては、別稿で改めて論じることとしたい。

注

- * 本稿は、JSPS 科学研究費・基盤研究 (C) 「近現代インドのユダヤ教徒のライフ・ヒストリーと「国民国家」」(課題番号 18K00988, 代表者: 井坂理穂, 2018 年度-) の助成のもとで行われた研究の成果の一部である。本プロジェクトのその他の成果としては、小磯千尋によるベネ・イスラエル作家の文学作品の分析がある(「エスター・デイヴィッド『Book of Esther』とインドのベネ・イスラエル」『亜細亜大学 国際関係紀要』第 31 巻に掲載予定)。
- 1) Bnei Israel, Beni Israel, Benai Israel などの綴りもみられるが、英語文献で最も多くみられるのは Bene Israel の綴りである(英語読みはベネ・イズラエル)。マラーティー語の綴りも多様であり(बेने इसराएल, बेने इसराएल, बेने इसरायल など)、それによりカタカナ表記も「ベーネー・イスラーエール」「ペーネー・イスラーイル」など複数の可能性があるが、ここでは読みやすさを優先し、長音記号を除いた「ベネ・イスラエル」の表記を用いる。なお、「ベネ・イスラエル」というコミュニティ名がいつどのように使われるようになったのかについては諸説があるが、いずれも史料的に裏付けることは難しい
 - 2) 「ユダヤとは誰か」という問いに関しては、市川 [2019]、市川他 [2008]、臼杵 [2020] その他を参照。なお、鶴見 [2020] が指摘するように、「ユダヤ」と呼ばれる人々を個人でみたとき、「ユダヤ」としての側面は、「自己 (self) のなかに含まれる一つの側面 (aspect)」(37) にすぎないことにも改めて留意したい。
 - 3) 例えば、Aafreedi [2016], Egorova [2018], Isenberg [1988], Israel [1984], Katz [1995, 2000], Katz, et al. [2007], Numark [2001, 2012], Roland [1989], Singh [2009], Strizower [1971], Timberg

[1986], Weil [2002, 2012] などがある。植民地期に執筆された著作で、このコミュニティの歴史を記したものとしては、Kehimkar [1937], Reuben [1913] がある。その他、ベネ・イスラエル出身の女性たちをめぐる物語や彼女たち自身の語りを収集した文献 [Haeems 2000, 2002; Haeems and Haeems 2014; Shazor 2018] や、ここでは紙面の関係で紹介できないが、ベネ・イスラエル出身で人文学・社会科学の研究者ではない人々が、自らのコミュニティの歴史や文化を書き綴った文献もある。2013 年には、インド・ユダヤに関する文献の目録が出版されている [Katz 2013]。

- 4) ベネ・イスラエル詩人・作家の文学作品の分析としては、Guttman [2013] などを参照。アフマダーバード在住で、ベネ・イスラエルの人々の日常に焦点を当てた文学作品を次々に発表しているエスター・デイヴィッド (Esther David, 1945-) は、近年、とりわけ多くの注目を集めている。ベネ・イスラエル出身の文学者たちについては別稿で論じる。
- 5) インドのユダヤに関する邦文文献としては、インドにおける旅の記録とともに随筆風に執筆された [徳永・小岸 2005] がある。
- 6) 「ユダヤ」「ユダヤ教徒」「ユダヤ人」という日本語の訳語をめぐるのは、すでに様々な議論が展開されているところだが、本稿では英語の Jews を一貫して「ユダヤ」と訳す。大塚 [2009] が指摘するように、ユダヤというカテゴリーがどのような特性をもつのかは、彼らが生きてきた地域や頻繁に接触する「他者」の存在に大きく規定されるため、「ユダヤ」が示す内容や意味合いも、それぞれの状況により変化する。植民地期のベネ・イスラエルの場合、彼らが古代にインドに移住したユダヤの子孫としての自らのアイデンティティを語る際には、「民族」としての「ユダヤ人」としてとらえるのが適切であるように思われるが、インド植民地行政やインド・ナショナリズムのなかで、多様な「宗教コミュニティ」から構成されるインド像が語られるときには、「ユダヤ教徒」の訳語のほうがなじみやすい。ここでは「ユダヤ」のカテゴリーがもつ多様な意味合いを考慮し、「人」や「教徒」をつけずに、「ユダヤ」の訳語で統一する。
- 7) Christabel Lobo, 'India's Jew Town only has a few Jews left, but traditions and landmarks remain', *The Times of Israel*, 20 December 2020.
<https://www.timesofisrael.com/indias-jew-town-only-has-a-few-jews-left-but-traditions-and-landmarks-remain/> (2021 年 10 月 15 日閲覧)
- 8) 以上のほかに、1930 年代以降にヨーロッパからインドに移り住んだユダヤの人々もいる。詳細については、Bhatti and Voigt [1999] を参照。
- 9) 彼らがたどり着いたといわれるナヴガーオン村の海岸部には、1980 年代に記念碑が建てられている。なお、この地方の上位カーストであるチトパーヴァン・バラモンの間でも、同じように船がコーンカン沖で難破し、7 名の男女が流れ着いたとの伝承があり、彼らの起源をめぐる諸説が存在する [Kehimkar 1937: 14-5; Reuben 1913: 4]。
- 10) ベネ・イスラエルの伝承や慣習のなかには、この地域でユダヤ教が理解されるなかで、どのような独自の解釈がなされていったのかを示すものも少なくない。例えば、彼らのなかでは預言者エリヤに対する信仰が広くみられ、天国へ向かう途中に馬車にのったエリヤがコーンカン地方を訪れたとの神話が残っている。そのときの馬のひづめのあとが残されたとされる岩もあり、今でもベネ・イスラエルの人々の聖地となっている。ベネ・イスラエルの家々では、馬車に乗ったエリヤの姿を描いた印刷画が飾られていることも多い [Schwartz, Sand, and Carter 2015: 20-2; Isenberg 1988: 112; Katz 2000: 101-2]。
- 11) ベネ・イスラエルの間では、比較的早くから教育の重要性が認識され、女子教育にも積極的な家庭が多くみられた。1931 年センサスによれば、5 歳以上の識字率は、インド (ビルマを除く) 全体では 8.3 パーセント (男性 13.8 パーセント、女性 2.3 パーセント) であった

- のに対し、インドのユダヤ・コミュニティの識字率は、それを大幅に上回る 41.6 パーセント（男性 48.8 パーセント、女性 33.8 パーセント）となっている [Hutton 1933: 328]。
- 12) こうした主張が展開されている様子については、[Reuben 1913: 17] その他を参照。
 - 13) モンタギューはユダヤ出身であり、1917 年 12 月に開催された第一回ベネ・イスラエル会議では、ユダヤ出身の初のインド担当大臣への祝辞が決議として出されている [Report of the 1st Bene-Israel Conference 1918: 4-5]。
 - 14) オルスヴァンゲルの訪問後、ガーンディーの旧友であるヘルマン・カレンバッハもインドを訪れ、ガーンディーに会見し、シオニズムに対する理解を求めている。
 - 15) 彼は滞在中の活動の様子を日記に書き残している。日記はドイツ語で記されているが、本稿ではその英語訳 [Ben David 2002] を参照した。
 - 16) オルスヴァンゲルは 1941 年にインドを再訪し、ベネ・イスラエルからの歓迎を受けている [Roland 1989: 231]。
 - 17) 詳細については、Roland [1989], Bhatti and Voigt [2005] などを参照。

参考文献

- Aafreedi, Navras Jaat. 2016. *Jews, Judaizing Movements and the Traditions of Israelite Descent in South Asia*. New Delhi: Pragati Publications.
- Baines, J.A. 1893. *Census of India, 1891: A General Report*. London: Eyre and Spottiswoode.
- Ben David, Yohanan. 2002. *Indo-Judaic Studies: Some Papers*. New Delhi: Northern Book Centre.
- Bhatti, Anil and Johannes H. Voigt (eds.). 1999. *Jewish Exile in India 1933–1945*. New Delhi: Manohar.
- Cohen, Israel. 1925. *The Journal of a Jewish Traveller*. London: The Bodley Head.
- Cohen, Israel. 1956. *A Jewish Pilgrimage*. London: Vallentine, Mitchell.
- Egorova, Yulia. 2006. *Jews and India: Perceptions and Image*. Abingdon: Routledge.
- Egorova, Yulia. 2018. *Jews and Muslims in South Asia: Reflections on Difference, Religion, and Race*. New York: Oxford University Press.
- Egorova, Yulia and Shahid Perwez. 2013. *The Jews of Andhra Pradesh: Contesting Caste and Religion in South Asia*. New York: Oxford University Press.
- Enthoven, R.E. 1990 (1922). *The Tribes and Castes of Bombay*, Vol. I. New Delhi: Asian Educational Services.
- Guttman, Anna. 2013. *Writing Indians and Jews: Metaphorics of Jewishness in South Asian Literature*. New York: Palgrave Macmillan.
- Haeems, Nina (ed.). 2000. *Rebecca Reuben: Scholar, Educationalist, Community Leader 1889–1957*. Mumbai: Vacha.
- Haeems, Nina (ed.). 2002. *Jewish, Indian and Women Stories from the Bene Israel Community*. Mumbai: Vacha.
- Haeems, Nina and Alysha Haeems (eds.). 2014. *Indian Jewish Women: Stories from Bene Israel Life*. New Delhi: Mosaic Books.
- Hutton, J.H. 1933. *Census of India, 1931, Vol. I, India, Part I, Report*. Delhi: Manager of Publications.
- Isenberg, Shirley Berry. 1988. *India's Bene Israel: A Comprehensive Inquiry and Sourcebook*. Bombay: Popular Prakashan.
- Isenberg, Shirley Berry. 1995. 'The Bene Israel Villagers of Kolaba District: Generations, Culture Change, Changing Identities', in Nathan Katz (ed.), *Studies of Indian Jewish Identity*. New Delhi: Manohar.
- Israel, Benjamin J. 1984. *The Bene Israel of India: Some Studies*. Hyderabad: Orient Longman.
- Jenkins, Laura Dudley. 2019. *Religious Freedom and Mass Conversion in India*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

- Jewish Landmarks of India*. 2015. 3rd edn. Mumbai: A Hong Kong Heritage Project Ltd. and the American Jewish Joint Distribution Committee (India) Publication.
- Jewish Tribune*.
- Judah, Irene. 2017. *Evolution of the Bene Israels and Their Synagogues in the Konkan*. Pune: Vishwakarma Publications.
- Katz, Nathan (ed.). 1995. *Studies of Indian Jewish Identity*. New Delhi: Manohar.
- Katz, Nathan. 2000. *Who Are the Jews of India?* Berkeley: University of California Press.
- Katz, Nathan. 2013. *Indian Jews: An Annotated Bibliography, 1665–2005*. New Delhi: Manohar.
- Katz, Nathan, Ranabir Chakravarti, Braj M. Sinha, and Shalva Weil (eds.). 2007. *Indo-Judaic Studies in the Twenty-First Century: A View from the Margin*. New York: Palgrave Macmillan.
- Kehimkar, Haem Samuel. 1937. *The History of the Bene Israel of India*. Tel-Aviv: Dayag Press.
- Marcus, Nathan. 2019. 'Jewish Sports and Sectarianism in Pre-Independence Bombay', in Shalva Weil (ed.), *The Baghdadi Jews in India: Maintaining Communities, Negotiating Identities and Creating Super-Diversity*. Abingdon: Routledge.
- Masliyah, Sadok. 1994. 'The Bene Israel and the Baghdadis: Two Indian Jewish Communities in Conflict', *Judaism: A Quarterly Journal of Jewish Life and Thought*, 43,3, 279–293.
- Numark, Mitch. 2001. 'Constructing a Jewish Nation in Colonial India: History, Narratives of *Discent*, and the Vocabulary of Modernity', *Jewish Social Studies*, 7,2, 89–113.
- Numark, Mitch. 2012. 'Hebrew School in Nineteenth-Century Bombay: Protestant Missionaries, Cochin Jews, and the Hebraization of India's Bene Israel Community', *Modern Asian Studies*, 46,6, 1764–1808.
- Report of the 1st Bene-Israel Conference 1917*. 1918. Bombay: Purandare Company Printing Press.
- Reuben, Rebecca. 1913. *The Bene Israel of Bombay*. Cambridge: The University Press.
- Rebecca, Rebecca (ed.). 1917. *The Bene-Israel Annual and Year Book, 1917–18*. Bombay: Bombay Vaibhav Press.
- Roland, Joan G. 1989. *Jews in British India: Identity in a Colonial Era*. Hanover: University Press of New England.
- Schwartz, Bryan, Jay Sand, and Sandy Carter. 2015. *Scattered among the Nations: Photographs and Stories of the World's Most Isolated Jewish Communities*. San Francisco: Weldon Owen.
- Shazor, Ilana (ed.). 2018. *Mother India, Father Israel*. Or Akiva: Kammodan Mocadem Publishing.
- Singh, Maina Chawla. 2009. *Being Indian, Being Israeli: Migration, Ethnicity, and Gender in the Jewish Homeland*. New Delhi: Manohar.
- Strizower, Schifra. 1971. *The Children of Israel: The Bene Israel of Bombay*. Bombay: Oxford University Press.
- Timberg, Thomas A. (ed.) 1986. *Jews in India*. New York: Advent Books.
- The Times of India*
- Weil, Shalva (ed.). 2002. *India's Jewish Heritage: Ritual, Art, & Life-Cycle*. Mumbai: Marg.
- Weil, Shalva. 2012. 'The Bene Israel Indian Jewish Family in Transnational Context', *Journal of Comparative Family Studies*, 43,1, 71–80.
- Weil, Shalva (ed.) 2019. 'Super-Diversity among the Baghdadi Jews of India', in Shalva Weil (ed.), *The Baghdadi Jews in India: Maintaining Communities, Negotiating Identities and Creating Super-Diversity*. Abingdon: Routledge.
- 市川裕. 2019. 『ユダヤ人とユダヤ教』 岩波書店.
- 市川裕・臼杵陽・大塚和夫・手島勲矢(編). 2008. 『ユダヤ人と国民国家——「政教分離」を再考する』 岩波書店.

- 臼杵陽. 2013. 『世界史の中のパレスチナ問題』 講談社.
- 臼杵陽. 2020. 『「ユダヤ」の世界史』 作品社.
- 大塚和夫. 2008. 「ユダヤ教徒」と「ユダヤ人」の差異をめぐって」市川裕他（編）『ユダヤ人と国民国家——「政教分離」を再考する』 岩波書店.
- 鶴見太郎. 2020. 『イスラエルの起源——ロシア・ユダヤ人が作った国』 講談社.
- 徳永恂・小岸昭. 2005. 『インド・ユダヤ人の光と闇——ザビエルと異端審問・離散とカースト』 新曜社.
- 奈良本英佑. 2005. 『パレスチナの歴史』 明石書店.